

はじめに

「最近の若い者は……」

地域活動実践センター長 三 和 優

日本では「最近の若い者は…」という決まり文句で、年配の人が若い人たちを批判することが多いようです。古くは、紀元前 2000 年頃のヒッタイト王国（現在のトルコあたり）の粘土板で作られた書簡に「最近の若い者は…」といった現状を嘆くことが書かれてあるそうです。古代ギリシャの哲学者プラトンも「最近の若い者は、目上の人を尊敬せず、親に反抗… 道徳心のかげりもない」と書き残しているそうです。平安時代にも、当時の若者のふるまいについての批判がこの決まり文句で書かれているそうです。

1970 年代の日本でも、「無気力・無関心・無責任」の「三無主義」ということが青年に対して言われるようになり、次には「無感動・無教養・無学力」の 3 つを加えた「六無主義」が高校生などの精神状況をさして使われるようになりました。

1977 年には精神科医の小此木啓吾氏は、青年が自分の進路を決定するにあたり、いつまでも結論が出せないまま目的もなく過ごしてしまい、実社会に自分を位置づけることを回避する心理状態を「モラトリアム人間」と呼びました。

1986 年には「新人類」ということが流行語になり、今時の若者はどこか遠い星からやってきた「エイリアン」のように、大人からは理解ができないものと考えられたのです。

それでは、今時の若者たちは前の世代のひとびとに比べて、どのようなところが違ってきているのでしょうか。これに関して、心理学者の速水敏彦氏は『他人を見下す若者たち』（講談社 2006 年）で次のように述べています。

最近の若者を特徴づける現象として、「自分に甘く、他人に厳しい」「努力せずに成果がほしい」「すぐにいらつき、キレる」「無気力、鬱になりやすい」「『悪い』と思っても謝らない」「いじめの悪質化、陰湿化」などを取り上げています。そしてこの現象は「他者を見下したり軽視することで、無意識的に自分の価値や能力に対する評価を保持したり、高めようとすることで自分は有能だと感じる（仮想的有能感）」が原因であろうと言っています。彼はこのことを実証するデータを得るために 8 年ほどかけて、約 16,000 名もの人を調査しました。その結果、「仮想的有能感」はほとんどの年齢でやや減少傾向にあること、特に大学生では 2005 年度をピークにしてかなり減少していることが分かりました。でも、まだまだ油断はできません。

今の子どもたちや若者には競争社会を勝ち抜くことが求められています。でも成功できる人はほんのわずかです。ですから必ず競争の敗者になる人がいます。その人はそのまま自分の負けだけを受け入れていけば、鬱になり自分がつぶれてしまいます。そこで自己防衛のために、「自分以外はバカ」と無意識的に思い込み、他者を批判するのです。競争社会、格差社会を生き抜くための手段として、自分が傷つくことから守るための「仮想的有能感」にはそれなりの存在意味があります。でも「仮想的有能感」はよくないものだと思います。「人と協調できない、敵意や嫉妬で衝突を繰り返すような、殺伐とした社会」でも、ちっとも構わないと思うのなら別ですが。